

令和2年度第1回安芸高田市総合教育会議議事録

日時	令和3年1月14日(木) 午前11時
場所	市役所第2庁舎3階 第1委員会室
出席者の職及び氏名	市長 石丸 伸二 教育長 永井 初男 教育委員 山本 博昭、金川 佳寛、亀井 聖、広瀬 ゆみ子、迫広 淑文

【総務課長】

それでは定刻となりましたので、ただいまから令和2年度第1回安芸高田市総合教育会議を開催いたします。開会に先立ちまして、本日の会議日程並びに資料の確認をさせていただきます。

まず、本日の会議日程は、お手元の会議次第のとおりです。

次に、配布資料の確認をいたします。1枚ものの会議次第、それと1枚ものの会議の配席図、冊子となりました安芸高田市教育大綱(素案)をそれぞれ机の上に配付をさせていただきます。

それでは早速、次第に沿いまして進めてまいります。ここからの議事進行につきましては、石丸市長に議長を務めていただきたいと思います。それでは、石丸市長よろしく願いいたします。

【石丸市長】

皆さんおはようございます。本日はご多忙の中、お集まりくださいまして誠にありがとうございます。皆様ご承知の通り、この教育というものは、非常に効率の良い投資で、故に極めて重要な行政のサービスだと捉えています。その意味では、この会議が安芸高田市の未来を決めるといっても過言ではありません。英知を結集したいと考えていますので、お力添えのほどどうぞよろしくお願いいたします。

では、早速ですが、協議を始めさせていただきます。お手元に配布してある資料なんですけれども、安芸高田市教育大綱の素案というペーパーがあるかと思います。こちらについては、事前にご案内をして目を通していただいているということですので、要点を確認をしていきたいと思っております。じゃあ資料開いていただきまして、3ページ目からが1という番号が振ってあると思っております。

まず、教育大綱の位置付けなんですけれども、この絵にある通り安芸高田市教育振興基本法の上位概念として位置づけています。過去の経緯はいろいろとあるんですけれども、本来あるべき位置に変更しているということです。ですので、具体的な施策ではなく、施策の方向を定めるという趣旨になっています。

その点でご覧いただくと、続いて4ページの2番なんですけど、今、申し上げた通り安芸高田市教育振興基本法で個別の計画、施策が策定されるとなっています。

そして3番目ですね。大綱の対象範囲なんですけど、これは事前の協議で主に広瀬委員から

ご提案をいただいたところなんですけれども、家庭教育ですね。ここも当然含まれるべきだろうと。従いましてここにあるとおり、家庭教育、学校教育、そして社会教育。生涯に渡っての教育が対象となっています。

次に4番目ですが、大綱の期間なんですけれども、こちらは令和2年度から令和5年度までの4年間としています。

そして、5番目基本理念です。ここが一番の要となっているんですけども、この文章の中にあります通り、市民一人一人が豊かな人生を送ることができるよう。これが中心にあって一番大事な狙いとなっています。従来は、郷土愛。故郷を想うという言葉もあったんですが、それを今回は外しています。その意味は何かと言いますと、教育というものは、兎にも角にも受ける側が主役であるということです。教えられ、育まれる側が常に主人公であるべきだ。当たり前の話ではあるんですが、その当たり前のことを、改めてここで明示したということです。

そうしていきますと、最後の6番目なんですけども、目指す施策の方向として、資料上は3つ挙がっていますが、申し訳ありません。事務上のやり取りの中で最終方針といいますか、ここでお伝えすべきポイントとしては、基本方針3を落としたいと考えています。その理由は、今5番目で申し上げたところですね。つまり狙いは受け手だと。だとするならばこの基本方針の1と2でそれが充足されます。言葉でお伝えしておく、基本方針1というのは、この中の文章にありますけども、子ども達が対象となっています。で、そうしてくると、それ以外ですね。基本方針2のところでは主には大人、もちろん子どもをここで排除する必要はないので、広く市民と行ってよいかと思います。この2軸で施策の方向を考えていきたいと思っています。

基本方針3のこの言葉でいうと歴史・文化の保護・継承と活用なんですけども、これはこれで大事なことです。ただそれは教育の目的とはちょっと違うだろうなと考えています。例えば、これが基本方針1・2がA・Bときて、急にCじゃなくて3という数字が振ってあるみたいなものですね。概念が違うと。別の視点ですので、この大綱、極めて理念として中心に据えるべき存在。その中には敢えてこれは含まれるべきではないという風に考えています。したがって、この6の最終的な形としては、素案としては、基本方針の1と2という風に考えています。

以上が要点となりますが、ここから先はそれぞれ委員の皆さまにご意見を頂戴したいと思っています。すでに目を通していただいていた、特に1から5のところですね、この内容についてはいかがでしょうか。

【迫広委員】

せっかくの機会なので、一つお聞きをしてみたいんですけども、はじめにの中に、三分の一くらいのところに、安芸高田市の教育の質を追求していく必要があるという文言がございます。

市長さんの Twitter をちょっと拝見させてもらうんですけど、その中でもやっぱり教育の質を高めるんだというような表現、言い方があると思います。これに対して全く異論は無くても当然なんですけども、少しぼんやりしているなという感じがします。なので、市長さんがお考えの教育の質を高めるというのは、もう少し具体的にどういう方法や手段でもって、どんな力をどのレベルまで引き上げることが教育の質を高めることになるんだというあたりをもう少し教えていただければ。

特に今、学校現場は、来年度の経営構想を練る段階にきていますので、事務局のメンバーも私もいろんな機会を通じて学校の先生方にそのことをお伝えして、説明したり指導したりという機会もございますので、そういうお答えをちょっと聞いて、私なりに咀嚼しながらそれをまた還元していきたいと思っていますので、そのあたりを少しお話いただければありがたいと思います。

【石丸市長】

まず、教育で得られるべき力というのは、この直前に文字で書いているのですが、思考力、判断力、表現力といったものになるかと思っています。私の考えとしては、これらが常に十分施されているのか、言い方を変えるとそれが付くような教育になっているんだろうかと、いうこれはもう永遠の問いかけになるかと思うんですが。その観点でこの文言を入れています。言い方を変えると、大人になった時に、まあ主に子どもの教育の観点でお話すると、大人になったときに、小学校中学校、高校、大学を含めてあの時の時間が今役に立っているなと思えるかどうかですね。これは人によると中学校のあの時間は意味がなかったなと、個人的な感想とはいえども、そういう評価もあるかとも思います。ただそれは、本来あってはならないといえますか、非常に勿体ないことなんだろうなと思います。そうじゃなくて、小・中以降ですね、教育という場で過ごした時間が大人になってみて本当に役に立っているなと、意味があったなと思えるように、この力を付けてもらわないといけない。力が付くような教育にしないとならないといけないんだなと。そこを教育の質と考えています。

これをもう少し具体的にお話をしますと、例えばあのペーパーテストですね。点数で評価される、国語算数理科社会みたいな。そのテストで計られる点数、学力というものもまた大事な力だと思っています。ただそれが、これは今の教育全般の難しい課題かもしれないんですが、ちゃんと活かされている、生きてると実感できるのかどうなのか、できる人が実は、残念ながら多くはないかなと思っています。でもそんなことはなくて。本当に教育、そこで得られたこの思考力等、力というのは、学力ですね。必ず役に立つもののはずです。でも本人たちが役に立っていると実感できないとするならば、その力がもしかすると足らなかつたり、その力のベクトルが理想とちょっとずれている可能性ですね。例えていうならば、理科のテストで、いろいろ学ばわけなんですけども、カエルの子の成長過程を一生懸命教育したって、それ自体は人生で何も役に立たないかもしれないですね。それを覚えるだけ。でもどこかで約に立つ場面があるはずなんです。そこまでちゃんと見据えて教育を施せて

るかどうか。算数も九九もみんな日本人はほぼ全員やるはずなんですけども、それより先の九九、算数、数学がいかに社会生活を送る上で、もっと言うと仕事をする上で役に立つのか。そのあたりを、これは私は供給サイドの課題なのかなと思っているんですが、教える側がどれぐらい意識できているのか。そのあたりを改めて考えていくこと、整えることが、教育の質といわば供給サイドの課題の解決ですね。そこに繋がっていくんだらうと思っています。

【迫広委員】

ありがとうございます。

【石丸市長】

お願いします。山本委員。

【山本委員】

2点ほど、今に関連してですね、思考力、判断力、表現力っていうのは、大切な力だと思うんです。その後に総合的な生きる力っていう風に市長さんが考えておられるんですが、そこらは学力の中でも、例えば、非認知能力。忍耐力とか協調性とか人間性。そこらもやっぱり入っているという風に考えてよろしいでしょうか。

【石丸市長】

おっしゃる通りです。はい。思考力、判断力、表現力というのは、何て言うんでしょうか。いくつか無数にある中の3つほど例を挙げたということです。

【山本委員】

分かりました。もう1点ですが、さきほど基本方針の3という、歴史・文化の保護・継承の活用というのを、ここでちょっと省いたというか削られたということで、確かに市長さんの考えを聞いたら分かりました。ですが、そうはいつでも基本的計画、具体的な政策の中でやっぱり、取り組みを後退しないような取り組みを是非行っていただきたいなという風に考えていますのでよろしくお願いします。

【石丸市長】

承知しました。あの、これが上位の概念で、その後続く教育振興基本計画のところですね、要は手段をどうしていかうかという議論になるかと思いますが、そこにまさに歴史文化の保護継承・活用ですね、これがテーマになってくるんだというふうにとらえています。これ先ほどの教育の質、その理科の話をしましたけども、それもここにあてはまるんだと思います。歴史や文化が確かにそこには存在する、これまでも存在してきた訳なんですけども、それがいかにです、元に戻して豊かな人生を送ることができるようになるか、それに使えるか

どうかポイントだと思います。私は、これはちょっと酷な言い方かもしれないんですが、無用の長物だとしたら必要ないことは当たり前のことなんですけども、今同じことを繰り返して言ったんですが、ではなくて、必要なもの、意味があるからこそ継承ができて保護もできるんだという風に捉えています。その意味ではこれは兎にも角にも具体的な話として、しっかりと取り上げていきたいなと考えています。

いかがでしょうか。その意味では1から5。あと6に関わるところで。基本方針1と2のあの太い字で書いてあるタイトルももう少し調整があってもよいようには思っています。というのは、私が口頭では申し上げたんですが、子どもたちと広く大人も含めて市民ですね。というのが、一読タイトルだけで分かるようなフレーズにしてみてもどうかかなとも思っています。

いかがでしょうか。教育長何かありますでしょうか。

【永井教育長】

以前の大綱がですね、善し悪しを言うのではなくて、今回の石丸市長を中心に考えていただいた大綱というのは、非常にスッキリしてきましたし、位置づけというのが明確になりましたので、これを受けて私たち教育委員会はずですね、具体の進行計画というものを定めていくということで、非常に取り組みの視点というものが絞りやすくなったという風に考えています。特に子どもといますか、学校教育に視点を当てましたら、今、広島県が15歳の子ども達につけたい力として、自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる力というのを県の教育委員会が示しました。当然、安芸高田市の小学校中学校、中学校を卒業する段階の15歳の子ども達にはその部分を意識して教育に取り組んでいく必要があるわけですが、そういった面からも非常に逆にですね、大きな大綱という形で示していただいたということで具体の進行計画辺りが焦点化しやすくなったかなという風に考えております。

【石丸市長】

ご意見ありがとうございます。今、ご指摘いただきました通り大綱という名前からしてそうなんですけども、物凄く上位の概念です。ですので、これはどうなんだろう、ああしたい、こうしたい、こうすべきかな、ああすべきかなとなった時に、常にここに立ち返れるようなそういう位置づけが望ましいんだろうと思っています。繰り返しになりますが、受益者ですね。教育を受ける側が、何よりも重要なんだという、そこさえぶれなければ私はいろんなやり方が可能だと思っていますので、敢えて物足りないと言うと語弊があるかもしれないんですけども、大きな枠でここでは定めるようにさせていただきたいと考えています。

では、この基本方針の1と2のタイトルといますか文言については、改めてこちらで提示をさせていただいてもよろしいでしょうか。

(全員賛成)

でしたら、1と2がバランスがとれるようにきちんと整えて再度、皆様にご案内をさせて

いただきます。

では、最初の議題の教育大綱については以上とさせていただきます、続いてなんですけども、既にこちらをご案内してあるかと思うんですが、今回が令和2年度の第1回の会議なんですけども、今1月、2月、3月で終わりとなります。来年度に向けてですね、この会議をどう運用、運営していくかと、その話にもつながるんですけども、この安芸高田市における教育の課題というものをこの場で協議、共有をさせていただければと思っています。もし可能であれば、せっかく本日お集まりいただいている6名の皆様それぞれからそれぞれのご意見を頂戴したいと思っている次第なんですけども。よろしいでしょうか。広瀬委員お願いします。

【広瀬委員】

このような場は初めてということでも緊張しておりますが、思いはいっぱいあるのでお伝えしたいと思うんですがよろしいですか。

まず、最初は、石丸市長が就任された時、教育委員会議の後にご挨拶に伺った時、教育に対して、力のある子をしっかり伸ばしたい。それから取りこぼしなく教育を進めていきたいという風に熱い思いを聞かせていただいて、そういう教育に対する思いというのがとても伝わってきたので、嬉しくその挨拶を聞かせていただいたところです。それで今回のこの大綱にも0歳からの大切さというのも文言の中に入れていただいて、有難いと思います。で、私どうしても保育現場で働いていたものですから、家庭教育、それから就学前教育のところに思いが強いもので、その点で2点お願いしたいです。

まず一点目はですね、保育所、幼稚園、今は認定こども園にもなっているところもありますが、と小学校の連携。それから子育て支援課と教育委員会の連携。なんかこう市役所とかそういうところで行政って縦に縦に流れいくので、横につながった方が早く動けることがたくさんあると思うんですね。そこの連携を今もしていただいているんですが、更に強化していただきたい。というのがやっぱりあの大綱の1ページにもありましたが、社会情勢が急速に変化し、家庭環境や教育環境も大きく変化して行って、今の若いお母さんお父さんって本当に頑張っておられるんですね。特に保育園に来るお子さんって0歳からそれも朝7時30分に来られて、最後の18時30分、更に延長して19時までとか。その間、必死で働いて何とかこの子に力をつけたい。その思いがひしひし伝わってくるのが保育所の現場なんです。そういうところの思いをやっぱりこう子どもに関わる全ての人達。保育所、幼稚園、家庭、学校、地域。そこの大人の質が向上しないことには、学力の質、そういうところが高まっていかないと思うんです。で、そういうところでしっかり日頃からの連携がとれていたら、例えば、どこどこ小学校のだれだれ君にこんな課題が生じたという時に、そこに関わる人の知恵とか意見とか、これまでの取り組みを寄せ集めると早くにその子の課題が解決できると思うんです。そうしたら、孤立する家庭、孤立する親、孤立する子どもって一人でも二人でも減らしていけるのかなと思うんです。だからその連携というところをやっ

ていただきたい。連携をしていく上で一つ、私はこう在るべきと思うのが、幼稚園教育の場合は、既に外部制度というのが取り入れられていて、外から幼稚園教育を見てもらってご意見をいただくところがあるんですが、保育所にはそれがありませんね。安芸高田市には、幼稚園の数より保育所の数が多いはず。すると学校に上がっていく子どもの割合も保育所の中にたくさん。だけど、それを全く外部から何の指標も得られずに保育所だけで進めていくというのは、やっぱり偏りが生じるんじゃないかなと思って。保育も教育もそこに子どもに関わる大人のプロとしての質を高めていかなきゃいけないと思うんですよ。そうしたらどうしても外部からの評価というのが今後必要になってくるんじゃないかなと思うんですね。だからその連携を含め、一人の子どもにたくさんの目があって、たくさんの言葉がかけられるのが望ましいと思うので、是非そういうところを広げていただきたい。というのが1点です。

【石丸市長】

承知しました。

【広瀬委員】

それでもう一ついいですか。

【石丸市長】

もちろんです。

【広瀬委員】

12月1日の中国新聞に、東京の世田谷の砧公園ていうところがあるんですけども、その公園の紹介があったんです。私、安芸高田市に大きな意味を持った公園が欲しい。普通の公園じゃなくて、大きな意味を持った公園。それは、インクルシブル。全ての人が分け隔てなく使える。障害を持ったお子さんから乳幼児から小学生も中学生もお年寄りも集えるような公園で。例えば、体幹が凄く弱いお子さんも最近非常に多いですよね。発達障害を抱えたり。そういうお子さんの体幹を鍛えるような丸いブランコや背もたれのある回転遊具、車いすでスロープで上まで上がれる滑り台とか。それを全国各地で研究されつつ広がっているようなんです。そこへ公園を作ったから終わりではなく、地域の方がいつも目を届けて、一緒にその公園を発展していくというか。市長さんの言葉で『人がつながる田園都市 安芸高田』。いっぺんにつながるとも思わないし、公園の利用というのも安芸高田市は広いので、高齢者の方とか来れない方もいらっしゃるかもしれないですが。例えば、地域のサロンをたまにはその公園で小さな子ども達との姿を見ながら過ごすとか。子育てサークルの方が、そこを利用するとか。さまざまな形で。もちろん普通の乳幼児を育てておられるお母さん達が、三次のワイナリーの公園まで行かなくても安芸高田市にこんないい公園がある。そういう

ところで人とつながってほしいなとそういう施設があったらいいなと望みます。そうすることで子どもって遊びの中で認められたり、受け入れられたり、人の役に立てたり、褒められたり、「できた」って達成感を味わったり、そういうことはこういう公園の遊びの中で育つ。田舎でありながら思いっきり遊ぶ場がないなと思ってしまいます。子ども達って順応性があるから早くつながることはできるんです。子どもが繋がったら親もつながる。だから私は孤立した親、孤立した子ども達を1組でも減らしたいと思って。その2点です。お願いします。

【石丸市長】

1つ目のご意見、ご提案なんですけども。教育長がいらっしゃいますので、ほぼほぼ達成されるんだろうなと思っています。もちろん、市長部局としましてはあらゆる政策においてしっかりと加味していきたいと思っています。それこそ組織の編成等ですね。その辺りで連携を強化することもできるかと思っておりますので、その辺りもこれから検討を進めていきます。

2つ目の意味のある公園なんですけども、本当にこの観点が大事なんだと思っています。もちろん収益性がある事業はこの町で生まれると有り難いんですけども、収益性がない事業こそ行政が携わるべきだと思っています。その意味では、お金じゃない意味ですね。そこをしっかりと供給する側が捉えて。そして、市民の皆様を提供していく姿をこれからも追い求めていきたいと思っています。遊具の話は、ユニバーサル遊具というんですかね。海外等で人気が出て、私が小さい頃にはなかった非常にいいものが今あるんだなと思っていますので、その辺りをこの安芸高田市だからこそ市民の皆様が享受できる。そういう特別な意味というものを持たせていきたいと思っています。このインクルシブルという英語があったんですけども、包括という意味です。全てを包み込むという古くて新しい概念なんですけども、まさにこれからの新しいこの町。私は新/真・安芸高田市という言葉を使わせてもらっているんですけども。新/真・安芸高田市にとって象徴する言葉。インクルシブル、包括というものがあると思っていますので、意味のある公園を事業をとしてしっかり検討していきます。

他のところで。では、亀井委員お願いします。

【亀井委員】

亀井です。市長さんには、教育に大きな比重をかけていただいて頼もしく思いますし、また感謝しています。今日、私の方からは、特別支援の教育に関わってお話を聞いていただきたい。

就学前の子どもの相談または子どもに関わって専門スタッフの方がいろいろ取り組みをしていただくところは、安芸高田市には子ども発達支援センターという形で作っていただいて、保護者の方も大変頼もしく感じて利用されておられるところだと思うんですが、就学してからの小学校、中学校の子ども達。特にある程度重い障害を抱えている子ども達は、特

別支援学校なり特別支援学級でそれぞれの教育のニーズに応じて手当をしていただいている。しかし、通常学級の中に大きな課題になっているのが、発達障害、学習障害を抱えて、困り感を持っている子ども達がいる。その子ども達のニーズに応えていくことは、教育の質を高める。指導者の指導力アップ。それから家庭の保護者の子どもを育てる力のアップにつながると思うんです。今、小学校に在籍したり中学校に在籍している保護者で困り感を持っておられる方は、公のところは可部の北部こども療育センター、専門機関がある。民間は、近くでいうと三次の小鹿医療療育センターとしてあるんですけども。あと、保護者の方でいったら東広島市に出かけなければならない。大変敷居が高い。相談に行こうと思ってもなかなか日々の仕事等を抱える中で、じゃあ土日にといいると、土曜日にしか専門機関または相談機関が開いていないところもある。できたら、安芸高田市に就学した後の子ども達の発達に関わっての相談をするまたは診断ができる専門機関ができたら、身近なところで相談しに行かれるし、身近なところから専門の方に来ていただいて子どもの学校での実態を、実際に子どもを見てもらえてアドバイスをしていただける。教職員の方も実際に取り組みをしていく中で指導力アップにつながる。最初に言った質の高い子どものそれぞれのニーズに応えた教育がされていくんじゃないかなと思うんです。是非とも教育の質を高めていくためにもそういう拠点、センターができたら、一番ベストではないかなと思うんです。なかなかお金のかかることでもありますし、それからスタッフのこともありますし、なかなか難しいと思うんですが、できるだけ近い場所にそういう拠点ができればというのが私の今のところの考えているところです。以上です。

【石丸市長】

亀井委員ご意見ありがとうございます。この特別支援は、それはそれである一方で、普通学級の方でもその支援が必要なのということでしょうか。

【亀井委員】

通常学級でいう、はい。今の文科省の平成24年度の調査を通常学級の子ども達にどれくらい困り感があるのか調べた数字があるんですけども。それを見せてもらうと、通常学級において6.5%の子ども達が全国調査をした中で困り感を持っている子ども達がいると。だから安芸高田市でいえば、1900人くらいが小中在籍している子どもですけども、この中で支援学級の方へ位置づけられているのが80名くらい。通級という形で通常学級にいるんですけど、出かけて行って勉強。

子どものニーズに応えたような通級という形でさせてもらっているのが40名くらいいると思う。通級の子どもは、通常学級に位置づいていますけど、先ほど言った1800名くらいの児童生徒の6.5%は、約100名くらい。40人ほどが通級に行っていますから、通常学級の中には、まだ4、50名困り感を持っている子ども達がいる。先生方もそういう困り感を持っている子どもを抱えておられる。そういうところで先ほど言った拠点、センターが身近にあ

ると、なお一層教育の質を高めることにつながるのではないかなと。将来的には、ネットワーク。オンラインでつながって日常的に相談ができるような拠点ができれば一番いいんじゃないかと、私は思ったり、感じているところです。

【石丸市長】

承知しました。まずは、ニーズの把握をしっかりやりたいと思います。ニーズの形というんでしょうか。どこにどれぐらいの支援の必要があるのか。タイミングだったり、こういう形、こういう方法の支援が必要だとそれぞれの声があるかと思います。それをまず現場にしっかりと聞きに行く。その意味では前のところでお話に出ましたが、連携の強化ですね。主には、市役所から学校、教育の現場。ここの連携強化、それに務めたいと思います。それをやっていく上で話が全部つながるんですが、教育の質の向上ですね。今の話を伺うともっと適切であり、効果的な教育をする側ですね。その体制があるんだろうとお聞きしましたので、教育の質の向上につながるように順番にまずは、的確なニーズの把握、連携の強化からやっていきたいと思います。

【亀井委員】

お願いします。

【石丸市長】

ありがとうございます。では、金川さんお願いします。

【金川委員】

市長の冒頭の挨拶で教育に力を入れていただけるということで非常に心強く感じております。よろしく申し上げます。私の方から今、子ども達の話が出ましたが、私、ここの教育委員にならせていただいている立場としまして保護者の立場ということでここに来させてもらっています。

その中で学校の中で保護者のつながりというところで、今10年以上、PTAだったり学校の保護者の関係でいろいろさせておりますけども、だんだんと横のつながり最近薄くなってきているのをすごく感じております。これが何故そういうことを私が思っているかというのが、やはり学校の中の保護者の集まりとかがあった時の話をする時でも関心が薄らいだり、学校に対する関心の薄らぎ。あと、例えば子どものことですね。子どもの相談をする時に横のつながりができていれば、他の保護者に「こういうことがあるんだけど。どうなんだろうか」という相談等がしやすい。そこが絶たれていくと、相談するところもなかなかできません。できないので、どうしても蓄えていく。蓄えていくと、それが感情に出たり、悲観的な目で見たり、その目が学校に向いたりというような。市長もさっきおっしゃられた家庭学習。家庭に影響する。今、コミュニティスクールにも取り組んでいますけど、そういう

ところの保護者の中で地域だけで解決できる場所も出てくると思うんですが、やっぱり保護者間のつながりの厚みを持たせるようなことがもしできたら、もっと今のコミュニティスクールでも具体的な盛り上がりができると思うんです。コミュニティスクールの会議に出ましても関心のある方、ない方の温度差が凄くある。例えば、興味のある方は意見をたくさん言われるんですが、ない方は学校の方には興味がないからといったことがあったり。順番が前後してしまうんですが、孤立してしまうと、人に聞くことがなくなりますので。では、何を判断基準にするかという、SNS やインターネットになってくると思うんです。正しい情報判断がそこでできればいいんですが、やはり自分に対しての肯定的意見の検索になってくると思います。間違っているんじゃないかといった判断がなかなかつきにくいのではないかと凄く懸念しているんです。このことで急に親の仲の良いネットワークが広がるかといったらなかなかこれも難しいと思います。先ほども広瀬委員から話が出たんですが、私のこの問題を考えていって、やっぱり保護者間がつながりが出てくる時って幼少期の保育園や保育前の親のつながりの間でネットワークのつながりが大きく強く出てくるんじゃないかと思っています。今、その辺が薄くなってきているんじゃないかと思うんです。顔を突き合わせて相手の表情を読み取ったり、SNS で言葉を並べるのでは少し表情が相手を掴み切れないと思うので、その辺の強化や政策、そういうのがあれば横のネットワークが多少良くなっていくのかなと思うんです。その辺をお願いしたいと思うんですけども。

【石丸市長】

また違う角度からでの連携ということですね。

これは、私も自分の経験はないんですが、いろんなところでよく目にする悩みや課題という風には認識しています。その時に私なりにいつも気になるポイントとしては、かつてはその連携があって、でも今は弱くなってきている、なくなっていたりする。その差が何だろうと何によって生じているんだろうというのを不思議といいますか。答えを探している状況です。というのは、学校現場。一言で言えば保護者の方の関心が薄れているように思えるんですが、ですが、昔の親と今の親で子どもに対する愛情に濃淡や高低があるとは思わないです。全くそんなことはないと思います。でも表れている現象に差があるとすれば、その途中のどこかに理由があるはずなんですね。なので、そこが何なのか。これは私の一つの仮説なんですけども、やはり社会の変化が根底にあるように思います。少子化の理由でも挙げられますけども、女性が高学歴化して未婚率も高くなっているんですが、結婚されても専業主婦が減っているというような傾向があるかと思われま。そうした時、私のイメージですけど、私が子どもの頃は、PTA はお母さん、女性が圧倒的に多かったと思います。でもそれがだんだんとそうではなくなってきたといいますか。専業主婦の方が減れば参加しにくい状況が出たりする。一つの要素、可能性なんですけども。だとするならば、それが真意であるならば、その解決方法はあるのか。それは社会全般に通じる話なんですけども、男女共同参画ですね。まさに今、体現されてらっしゃるんですけども、男性の方も積極的に参加していけ

るような環境というものの整理。ここがあくまでも一つの仮説であり解決手段なんですけども、ポイントになるかなと思っています。ただ、そうした時に究極的には男女問わずお子さんを持っている方は、仕事をしていてもしていなくても皆さんが等しくこの PTA。保護者という立場で教育現場に関与できるのが理想なのかなと思っていますので、それは少し前から始まっている変化なんですけども。今の時代に合った姿というものをまた構築する必要はあるのではないかなと思っています。今、私が申し上げたのは、あくまでも仮説であり、一つの要素ではあるんですけども、一個一個分解して観察していくと、解決手段というのも見つけられるのではないかなと思っています。その意味では、今度は市役所と現場の連携になるかと思うんですけども、どの辺りに課題があるのか、ありそうなのかをまた是非ご教示いただければと思う次第です。ありがとうございます。

【迫広委員】

それでは、意見といたしますか質問になるんですけども。

実は、中学校の統合問題。ご承知の通り、小学校は、ほぼ計画通り進んでおりますけども、中学校は未だ手つかずの状態が続いていくと思うんです。平成 21 年だったと思いますが、学校規模適正委員会から答申を得てもう 10 数年経ちましたので、私はいよいよ来年度辺りからこれに着手すべき時期にきていると思っておりますけども。市長さんのその辺りのお考えや見通し、方向性をこんなものがおありだと思うので、話せる範囲でお話いただければそれらを参考にしてと考えています。

【石丸市長】

ありがとうございます。まず、結論からお答えしますと、着手する計画でいます。まさにご指摘していただいた通り、もう随分前からあるお話で、もつという課題になっています。私も市長に就任する前からどうなっているんだろうというのを調べていて、実際に市長になってみて、内部の方が資料がたくさんあるので確認したところ、随分前から計画、議論はし、かつ何度か市民の方へも情報提供といいますかヒアリング。意見交換をした経緯が既にあります。ただ、この中学校統合云々の話をどれほど認知していただいているかという、まだまだといいますか、全然これからなんだろうという私の認識です。これはもうそれこそ 5 年か 10 年前かに意見を聞いてその中に市民の方の見解として、今はまだいいかもしれないけど、行く行くは解決しないとイケない課題と。5 年か 10 年前に言われてたんですね。もう多分その時思ってたタイムリミットは過ぎていると思いますね。その意味では、もう来年度、着手する計画でいます。ただ、そのやり方なんですけども、まだ市民の中にほとんど認識がない。それこそ何が課題なのか、どういうメリットがあって、どういうデメリットもあるんだろう。その辺りの整理も市役所の中でやっているところではあるんですけども、まだ市民の方には届いてないと思いますので、まずはその認識の共有をしたいと考えています。

山本委員お願いします。

【山本委員】

私はですね、課題に思っていることがあるんです。もうよく言われるように急速に変化する社会ですよ。特に情報化社会というか凄く早い速度で進んでいると思うんです。教育委員会が管轄している図書館についてですね。私は、今までは図書や雑誌等を市民の皆様に出版、収集したり、保存したりして提供してきたという中心的にはあるんですが、今の情報化社会の中で例えば学校においては ICT 教育、教科書のデジタル化、ギガスクール構想。どんどん進んでいっている中で今までの取り組みに加えてインターネット等の電子情報というのもアクセスを提供したり、発信したり、また図書館が保存したりということでのサービスもいるんじゃないかなと思うんです。先ほどから出ているようにつながりとかネットワークの拠点にも図書館はなるべきじゃないかなという気持ちも持っているんです。そうしたところからこういう時代に適応した図書館はどうあるべきか。今ある図書館を想定しながら考えていく時期にきているのではないかなと思うんです。あり方も含めてですね。課題というか自分なりの思いを持っています。

【石丸市長】

ご意見ありがとうございます。実は図書館については、就任して割とすぐに支持といただきますか、市役所内で協議をさせてもらった経緯があります。まさにご指摘の課題を気になっていたところでして。つまり今あるといたしますか、これまでの図書館のある形というものが固定的だなという思いを持っていました。言い方をもう少しつっこんで言いますと、市民の方に本当に喜んでもらっているのだろうかという問いかけですね。実際にデータを確認しますと、残念ながらそんなに利用者は多くはないです。市民の方の一部が利用されているというのが今の図書館の姿となっています。ただ、それでは勿体なさすぎます。図書館の意義といたしますか。市民に対する役割ですね。とても大きなものがあるはずですので、それをもっと活かす。活かしたものにしていきたいと思っています。最初の方にありました電子データですね。電子図書館、イーライブラリーといったんですけど。これについても検討を内部で進めてきています。今の現状を少しご紹介しておくと、サービスとしては利用ができます。実際に導入されている他の自治体もあるんですが、現時点では、あまり本の種類がないみたいなんです。分野も限定的で新旧もそんなに最新のものがばんばん出るというわけでもないという状況のようなので、お金もかかるということも踏まえると、今すぐこれは導入しなくてもいいのかな。言い換えますと、してもそれほど用を足せないといえますか。市民の皆様に喜んでいただくには物足りないサービスになってしまうのかなという懸念がありまして、現状ではまだ検討段階に留めています。ただ、方向としては、紙の媒体からどんどん電子情報に進んで、変わっていくという風に思っていますので、これは引き続き常にサービス、アップデート。最新のものが生まれてきていますので、随時それらは検討、検証していきたいと考えています。ありがとうございます。

永井教育長、何かあれば是非お願いします。

【永井教育長】

私の場合は、課題という風な形でいいますと、全部自分に返っていきますので、この会議で夢を語るというのはふさわしくないとは思いますが、私個人のささやかな夢と同時に課題と思っているのが、やはり安芸高田市の就学前を含めて幼稚園、小学校、中学校に勤める教職員が安芸高田市の学校に勤めたいと思ってもらえるような学校にしたいし、それは私の責任だろうと思っているんです。以前は、石丸さんが小学生であられたり、中学生であられた頃というのは、まだ教職員の異動というものが、かつてでいうと高田郡。今でいうと安芸高田市の中での異動という範囲に留まっていたんですが、ここにきて所謂、広域人事と言いかたもするんですが、他の市町との交流が随分増えてきています。したがって、そういうことも踏まえたら、何よりも今、学校現場で頑張ってくれている教員。あるいはこれから教師を目指す若者の皆さんが教師になったら是非。安芸高田市の学校に勤めたいと。そういう安芸高田市の教育を作っていかなければいけないと思っています。抽象的になりますが、当然そのためには、特色でありますとか、そういったものを出していかなければならないんですが、ハード面、ソフト面。取り組む課題はあるんですが、先ほどから教育委員の皆様から出ていますように石丸さんが市長に就任していただいてから教育に対する重要度を非常に高いレベルで持っていていただいているという風に受け止めておりますので、是非、力を貸していただいて、とりわけソフト面は教育委員会の大きな仕事ということになってこようと思うんですが、どうしてもハード面。お金でありましたり、人ということになりますと、市長石丸さんをお願いすべきことも随分多くなろうと思いますので、是非今後もしっかり議論をつけさせていただいて、何としてでも安芸高田市の学校に勤めたいという教職員を増やすことによって、安芸高田市で学んでいる子ども達にそれこそ石丸さんがおっしゃる質の高い教育が提供できるようになると思っていますので、地元率がどんどん下がってきている安芸高田市のそこが一つのポイントになるのではないかなと感じているところです。

【石丸市長】

承知しました。魅力ある職場作り。特色のある現場ということで、しっかりとそれを留意していろんな事業を検討していきたいと思っています。

少し余談ではあるんですが、私は市役所においても今教育長がおっしゃったものが全く当てはまるとしています。というのは、今の子ども達が将来、市役所で働きたいと思ってもらえるような。もっと言うと、市長になりたいと思わせたいです。それぐらい魅力ある大人にならないといけないんだろうなと。そのためには、私達が必死に働く、仕事をするということが必要なんだろうといつも思っています。いろんなところでまたお手間をおかけしたりすることもあるとは思いますが、必死にこの安芸高田市の教育をより良いものにしていこうと思っていますので、今後ともご協力のほど是非ともよろしく願いいたします。

チャイムが鳴りましたので、令和2年度の第1回の会議を終了させていただきたいと思
います。本日いただきましたご意見について、その後の進捗をまた追って皆様にご報告をさ
せていただきたいと思います。年度に何回やる決まりはないという風に伺ったんですけど、
であれば、次回は、今日出たご意見に対する市役所からの解答というのを次、まだ検討段階
なんですけども、タイミングがいつ協議しているところなんですけど、来年度の第1回は、そ
の報告というところから始めさせていただきたいと考えています。

では、長きに渡ってお時間をいただきました。どうもありがとうございました。